シニシズム

七橋綴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シニシズム

【コード】

N3033M

【作者名】

七橋綴

【あらすじ】

僕の文章は失われてしまった。

高く高くロケットが飛び続けるように、
学生の頃にとある出版社の新人賞を受賞した僕は、
ただ黙々と文章を書き続けていた。
でも気が付けば宇宙の真ん中で僕の燃料は切れてしまった。
そして空っぽの僕はどうすることもできなくなった。

・ 00 プロローグ

今更どれだけ自分が不幸だったかなんて体重計のように乗って量れるものなんかじゃなくて、結局自分自身がどれだけ不幸を抱え込めるかという事だと思っている。

人にはそれぞれ堪忍袋の様なものがあって、それと同じように不幸に耐えられる袋みたいなのがあって、それが切れてしまうとたぶん壊れてしまうのではないだろうか。

だから外見的な強さではなくて内面的な強さを手に入れる事はとても難しい。と僕は少なくともそう思っている。

僕は煙草の灰を屋上に敷き詰められたコンクリートの畳に落してから、ふと夜空を見上げた。

東京の夜景は残業が生み出しているなんてよく言ったものだ。

眠らない町と呼ばれる東京も深夜と明け方のちょうど間の時間帯にでもなればすっかりと静まり返る。

星が綺麗に見える代わりに雲はあまり浮かんではなかった。

「破綻した文章は、同じくらいフィクションに近いものがあるんじゃないだろうか」

夜風が少し肌寒い。仕事明けと言う事もあってカーディガンは椅子の上に置いてきた。

ビルの屋上に月に照らされた影が二つゆっくりと動いた。

「小説家には変人が多いと聞きます」

くつくつと正面に立つ僕の編集長の吉崎さんは声を必死に殺して笑っていた。

どうやら彼の笑いの琴線に触れたらしい。

その笑い方はどこかやんちゃな男の子の様なあどけない顔だった。

「しかしどうだい秋良君。仮に変人の小説家が居たとする。でも書いている小説はいたって普通の純文学だ」

普通の小説って何だろうと考えてみたが答えは簡単にはでなかった。それは面白いのだろうか、それとも感動するのだろうか。

「普通という言葉は語弊があるかもね」

気が付けば煙草の先は短く、僕はそれを足で踏みつぶした。屋上には灰皿はなく各自勝手に吸うようになっていたし、そもそも深夜の屋上で煙草を吸う人間も僕くらいだ。

「僕に貴方の言う、普通の小説を書けばということですか？」

「それはイエスともノーとも言えないかな。君は輝かしいデビューから次々と作品を生み出していった」

僕は大学時代に書いた本を試しにと応募した出版社で新人賞を受賞した。

特に自信があつたわけでもなく、せっかく完成した文章をどこかに置いたままよりは、どこかに応募して自分がどのくらいかのレベルかが知りたかつただけだった。

過去を思えばそれは僕は文章からの決別を何らかの形で済ませたかつたんだと思っている。

それから数年間この業界に身を置き続けていた。

「システムエンジニアの話しよう。SEって略して呼ぶ事がほとんどだけど、どんな仕事か知っているかい？」

「ええ、知っています。システムの設計をする仕事ですよね」

「そうだ。つまりは情報システムの要件定義、設計、開発、運用やプロジェクトをマネジメントしたりする」

理系大学だから大体の事は知っていたが友人に聞く限りでは恐ろしく残業の多い仕事らしい。

つまりこの東京の夜景の要因の一つにシステムエンジニアの残業が含まれているということだ。

「システムエンジニアってのは、大抵がプログラマーを経て従事している。そして数年の経験の後にシステムの提案や企画を考えたりもするんだ」

編集長は大きく深呼吸した。

「でもね、この仕組みには大きな落とし穴があるんだ。システムエンジニアってというのは自分の提案や企画をプログラマーにシステムを構築してもらっただけで、このとき何が問題か分かるかい？」

その目には何を考えているか全く想像が付かなかった。

僕は屋上の柵に捕まって下の景色を俯瞰した。

「プログラマーの気持ちを知りすぎている」

「正解」

編集長はにやりと笑った。

「彼らはプログラマーの気持ちが分かって以上、無茶な企画や提案はできないのさ。そして、その制約が新しい発想を消滅させているのわ」

話を聞きつつも僕はずっと下の景色を覗きこんでいた。もう日付が変わろうとしているにも関わらず大通りを走る車は多かった。

信号機は休むことなく色を変え、道路わきの街灯も地面を照らし続けている。

「過去の発明者に変人が多いのは、こういった枠組みが良い意味で分からないからだよ。自分の出世や立場や周りの気持ちに左右されないからこそ、常人には考え付かないアイデアが生まれる」

風が大きな音を立てて僕を通り過ぎて行った。なんとなく予想は付いていた。

「秋良君は休むことなく書いてきたけど、でも知りすぎた」

たぶん仕事に慣れてしまったのと一緒の感覚。

五月病にも似ている。

僕は書き尽くしてしまったのだ。自分の経験や思いから膨らんだ物語を。

悔いが残らないように一生懸命事細かに書き尽くした。

だけれども今は燃料の切れたロケットのように、ゆっくりと地面に落ちている。

「一度、休んだ方がいい。切れた燃料はまた補充すればいいさ」

でも、燃料が見つからなければそれまでだ。

糸の切れたロケットはすぐさま地面へと叩きつけられる。

まるでこの屋上から飛び降りるみたいに。

「辛い君はそこそこ稼いでる。今のまま書き続けても、もちろん標

準的に売れるだろうけど、もう昔の様な物語は書けないだろうね」

邪魔したね、と言い残して編集長は屋上から姿を消した。

後からドアの閉まる音が重々しく響いた。

僕は踏みつけた煙草の吸殻を見つめながら先ほどまでのやりとりを深く考えてみた。

自分でも分かっていた。

昔はまるで掘れば掘るほど出る石油のように文章がすらすらと出てきていたのに、今となっては掘り尽くされた後のように、少しの文章しか出てこなかった。

もう一度夜空を見上げる。

一体僕は今どのくらいの所に居るのだろうかと俯瞰したまま考えてみた。

久しぶりに帰ってきた地元駅は、数年前と比べると何故か疲れ果てた老人のように所々が朽ち果てていた。見慣れた駅を降りると、住宅と同じ高さでできているので反対方向に向かうには階段を上り下りしなければならなかった。

改札口を出て階段を下りると視界が大きく開けた。

ロータリーの隅の方には少し色あせたタクシーがエンジンを切って止まっていた。

タクシーの運転手は停留所のプラスチックでできた椅子に座って暇そうに煙草を吸っていた。本来ならばお客が待つために使う椅子も今では従業員の休憩所としか機能していないようだ。

近くに隣接するバス停の看板も黄土色の錆が広がっていた。

人間が疲弊していくように、この町もまた少しずつ朽ちていく。その姿を数年ぶりに来る事によって僕は体感した。

やがてバスが駅にやってくる。大学までは原付のバイクで通っていたが、雨の日はよくこのバスを使っていた。運転手もバスも数年前と同じバスとは限らないのに、なんと懐かしい気持ちになれた。

僕は大きなポストンバックを肩にからい直して乗車した。

バスの中には人は誰も居なかった。平日の昼前の時間帯ということ考慮に入れても、誰も居ないバスの中の風景は何処か悲しいものがある。

まるで僕一人がどこか遠い国に連れて行かれるような錯覚に陥った。それならそれでいいと僕は思う。

今の僕は目的地こそあっても、目的も何もないのだから。

バスに揺られながら窓に映る風景に目を凝らす。

やはりどこか景色が薄れているような気がした。

やがてバスは住宅地を超えて、大きな山岳の方へと向かっていく。

僕は山岳のふもとの辺りの大学前でバスから降りると、降車場の直

ぐ正面には大きな門が建っていた。

どちらも色あせて、疲れ果てたような色をしていた。

門越しに見えるキャンパスも所々が寂れ、塗料が落ちて中のコンクリートが見えている。

講義中なのか生徒の数は疎らで、表情はどれも暗いような感じがした。

ポケットから出したメモ用紙には、真田と書かれた研究室の場所が書かれている。

キャンパス内に入るとなんだか不思議な空気に包まれた。

数年ぶりに戻って来たキャンパスだからか、まるで生まれ故郷の小学校を覗く様な感覚になる。

大学内の構造は変わっておらず僕はエレベーターに向かってリノリウムの床を歩いた。

六階までエレベーターで上がり、真田と書かれたネームプレートを探す。

エレベーターを降りて直ぐに左右に分かれた通路があり、それぞれ各研究室へと繋がる。

つまりはエレベーターが大学の中心地点であり、そこから左右に部屋が分かれている。

左右を振りかえって入口ドアの右上から伸びるプレートの名前を見たが真田という名前はそこにはなかった。

おそらく奥の方の部屋だろうと思ひ僕はとりあえず左側の通路を歩く。

通路の先はゆるやかなカーブを描いていて、奥まではプレートが見えなかった。

確かこのまま真っすぐ行くとちょうど大学の非常階段へと出れて、よく煙草を吸っている教授や生徒が集まっていた。

思いのほかすぐに研究室は見つかった。

事業中かと思いきや、扉に張られた教授の予定表の中には在室の上にマグネットが載せてあった。

相手側もこちらも尋ねる時間を伝えてはいなかった。
ノックを二回、中からくぐもった返事が返ってきた。

「失礼します」

ドアを開くと如何にも理系の研究室という感じがした。

左右に広がるラックにはオシロスコープや電圧計や電流計、様々な計測器が並び、ガラス張りのキャビネットの向こうにはプログラミング言語についての書籍が所せましと並んでいる。

その向こうのラックには広めの付箋紙が張られたコンピュータがいくつも並んでいた。

どれも購入当時は真っ白だったものが日焼けしてシミのように黄土色の汚れが付着している。

壁に掛けられた少し大きめのホワイトボードには黒いマジックで日割りにされて、予定が書かれている。

「ごめんごめん、こっちに座って」

真田さんは曇りガラスのパーティションからゆっくりと顔を出した。少ししわくちな顔に長く少し白髪交じりの髭が特徴的だった。

なんといかとても愛嬌のある顔だった。

不思議と人を引き付けるような感じだった。

「いや、しかし助かったよ。こっちも人手不足でね。いかんせんこんな田舎だからなかなか人が入ってこんのだよ」

僕は真田さんにもう一度会釈して黒いソファに腰を下ろした。

真田さんは珈琲を飲めるかどうかを聞くと、そのまま珈琲を準備し始めた。

パーティションの向こうには大きなディスプレイが二台繋がって

て、パソコンの乗ったデスクの周りに水道や冷蔵庫などが備えてあった。暫くして、大きなマグカップを二つ抱えて真田さんは戻って来た。真田さんとは、以前の小説で書いた物語の取材で知り合った。コンピュータを使用した画像処理をメインで研究していて、主に犯罪関係の仕事も兼任している。

「いえ、こちらも予定がかなり空いて、手持無沙汰です」

意味合いにおいて予定が空いたというのも正しい答えでもあり、仕事を失ったと言っても対して意味は変わらないような気がした。

「この卒業生というのもとてもいい」

僕は珈琲を口に付けた。インスタントコーヒーだからか少し味が薄かった。

「君は加藤さんの研究生だったそうだね」

「はい、加藤先生の研究生でした」

「あの人は面白い方だった。惜しい人を亡くしたよ」

まるでドラマの様な話ぶりだが、実際の話加藤教授は数年前に癌で亡くなった。

僕がその話を聞いたのは、数年ぶりに同じ大学の同僚と酒を飲んだ帰りでの話だった。

「本題に入ろう。君にお願いしたいのは、僕の助手として講義を何か受け持つて欲しい。あとは僕の研究の助手もしてほしい」

「助手　　ですか」

「なに助手と言っても簡単な荷物運びや、試作品のデバッグや感想

が欲しいだけだよ」
「そういうことなら」

そう聞いて少し安堵している自分がいた。
理系大学出身とは言っても、もう昔の話だし、
それに卒業してからというものの文学の世界に身を置いてきた。

「じゃあ、よろしく、秋良君」
「こちらこそよろしくお願いします」

おそらく生徒からも親しみを持たれているだろうと容易に察しがつ
いた。

それからは珈琲がなくなるまで、僕は大学でやってきた研究内容な
どの話もした。

先生（僕は彼を先生と呼ぶ事にした）は僕の研究テーマの一部に画
像処理関係だったことに大いに喜んだ。

僕の部屋は特別講師室ではなく、意外にも先生の部屋の正面になっ
た。

少子高齢化のせいで部屋はかなり余っているそうだ。

先生から鍵を頂くと、さっそく部屋に入ってみた。

部屋の中はほとんど出て行ったままの状態で、机や椅子はそのまま
残っていたし、入口側の棚には以前の研究室の資料や参考書がその
まま残っていた。

内容は環境に関するものや、統計についての本がほとんどだった。
思っていた以上に部屋はきれいだった。

部屋を一通り回ると、先生が講義についての話をしてくれた。

実際の話教授が少なく他の先生からも話が来るかもしれないという
こと、そして明日からさっそく講義を持ってほしいということだっ
た。

内容はプログラム入門だったのに加えて大学時代に使用していたプ

プログラム言語だったので無難にこなせるだろう。
先生から教科書を頂くと僕は手持無沙汰になった。
どうやら付箋が貼ってあり、授業がどこまで進んでいるのかは付箋
に書いてある日付を読めばある程度把握できた。

「ああ、そうだ。君は小説家なんだよね」

「ええ、そうです」

先生は思い出したように、ドアの前でそう言った。

「じゃあ、出会いを大切にね」

がちやり、と音をたててドアは閉まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3033m/>

シニシズム

2010年10月26日08時13分発行